

# モード Mode は語る

中野 香織

日本の伝統工芸をラグジュアリー製品として世界へ送り出そうという機運が高まっている。この領域で、最も重要なのが職人の存在である。その名を高め、広めたいと思うが、障壁が高い。日本の伝統的な美意識と、後継者獲得などの現代の要請が複雑にからみあうからだ。

西洋では、デザイナーと職人の役割は区分される。デザイナーが創造性を担い、職人がそれを具現化する。職人はデザイナーの世界観に奉仕する陰の存在であることが多い。

これに対し、日本の職人は、高い



ロンドンで展示された京都・丹後の工房「デザイン棟(とち)」による茶室のパーテーション

技術力だけでなく、デザインや企画の領域に踏み込むこともある。時に「クリエイター」や「アーティスト」

## 再認識したい職人の地位

### 日本発ラグジュアリー

に近い仕事をしている。こうした職人をデザイナーと同格として評価することで、伝統工芸の魅力を高め、ひいては後継者の獲得に貢献できるという考え方がある。

一方で、日本の職人の謙虚さを重んじる意見もある。谷崎潤一郎が「陰翳礼讃(いんえいらいさん)」で書くように、日本の美意識には、個人の独創性よりも先人の境地への到達を重視する傾向がある。これが職人の個性を前面に出すことへの抵抗感につながっている。

現代においては、グローバリズム

の反動として、日本古来の美德を再評価する風潮も高まる。谷崎が描いた日本型美意識が、伝統工芸の発展にとって力強い後押しとなるのは確かだ。しかし、すべての伝統的価値観が現代に適合するわけでもない。

美は物体と物体との作り出す陰翳のあやにある、という旨を谷崎は書く。職人の美意識もまた、伝統と現代の要請が織りなす陰翳の中で揺らんでいるように見える。日本発ラグジュアリーの基盤となりえる伝統工芸の未来は、職人の技術と創造性を正當に評価し、次世代に継承していくことにかかっている。手仕事の希少価値がますます高く評価されている今こそが、職人の地位を再定義するチャンスである。